「何にも無いみたいなんだけどなにかにすべて充たされているそんなイメージを音で表現したい！」

作曲家　若林千春（わかばやし・ちはる）

1961年長野市生まれ。草津市在住。東京藝術大学作曲科卒業、同大学院作曲課程修了。第65回日本音楽コンクール作曲部門（管弦楽作品）第1位・安田賞受賞。第1回東京文化会館舞台芸術作品募集最優秀賞。現代音楽セミナー&フェスティバル"秋吉台の夏2006～2013"招聘講師。現在までに10回の作品展を開催。2013年尾形光琳没後300年&伊藤若冲生誕300年記念プレ公演の作品を発表。平成19年度滋賀県文化奨励賞受賞。現在、滋賀大学教育学部教授。

Special対談

ベールに隠された作曲家の素顔に迫る

作曲家対談 ついに実現！

若林千春さん × 中村典子さん

作曲家といえば表舞台に出る機会の少ない、しかし音楽には不可欠な根源的存在。
曲がどのように書かれているのか、またどんな人がどんな思いでつくっているのか、興味は尽きない。
今回は滋賀県にゆかりの深い2人の作曲家にご登場いただき、思う存分語り合っていただいた。

なぜ曲ができていくのか、それは作り手にも判らない

中村●幼稚園の時のことです。講堂のオルガンを弾くと、風景との間に言葉にならぬ違和感を抱きました。ヴィヴァルディの『四季』を聴くと、子ども向けの音楽本に描かれるイタリアの風景にぴったりとマッチする、でも今自分がここにいる世界とはなにかしっくりこない。つまり〈位相〉のずれですね。私は草津市の琵琶湖に近い、田んぼに囲まれた牛や馬もいる田園地帯で育ったのですが、この風景そのものといえる音楽とは、どんな音楽なのだろうと心の奥底で感じてきました。この思いが〝音楽〟をつくる起点に深く結びついているように思います。つまり私が作曲する理由の一つに〈位相〉のずれがあるんですが、若林さんはいかがですか。

若林●う～ん「作曲って何？」と改めて考えてみると難しいですね。一人ひとり考え方も違うし、感じる筋みちも異なるでしょう。いまだに作曲がどういうことなのか判ってない。むしろ判っていたら作曲ってやっていなかったと思います（笑）。私は長野県の田舎の生まれです。大自然の野山、田畑、川や湖に囲まれて育ちました。中村さんのお話を伺って私の故郷と似通っているなと感じました。典型的な日本の田園風景の中に、伝承されてきた里神楽（さとかぐら）、あの秋祭りの提灯行列とともに笛や太鼓に舞いが伴う日常の中の非日常。自分の根底に子どもの頃に魅了され、夜遅くまで一緒に見ていたあの行列を、今もずっと追いかけていきたいという思いがあります。さて自分にとって西洋音楽とは、それにとても魅かれながらも、自分とはまったく異質のものとして眺めているところがあります。いつまでも追いかけていたいと思ってはいないのですね。私たちの先輩方も、大陸の文化・文字・楽器などをツールとして一旦取り入れながら、それらを完全に日本化していますね、例えばカタカナ・ひらがな・雅楽のように。

中村●「なぜ自分は作曲するんだろうか？」という問いかけがありますね。私の場合は、世の中で起こっていること、例えば〈9・11〉〈3・11〉など、人類全体が抱えるさまざまな問題に対し、自分なりに「なぜ？」と問いかけ答えることなのかもしれない。そこに自分で働きかけたい衝動が生まれてくる。つまり曲をつくるということは、世界とつながることなんでしょうね。加えて自分が腰を悪くしたこともあり、すぐに駆けつけたいけどできないというジレンマがあり、それが答えを見出したい思いを強くするように思います。地球の存在全体と対話したい。それが素晴らしいことであれ、恐ろしいことであれ、対話したいという思い。その方法が音楽なのでしょうね。でもなぜ曲ができあがるのかって、作曲家に訊（き）かれても判らない（笑）。

若林●私も同感です。なぜ曲ができるのかは、作曲家にも判らない！（笑）。創造に大切なのは、この世界をどのように感じているかの不思議な感覚、宇宙の裂け目に手を入れる時の触感みたいなものではないでしょうか。私の場合は、それを日本語の接頭辞の〈うつ〉の中に見出しています。〈うつ〉とは、うつほ・うつせみ・うつろひなど、古今の日本語の中に活きて、ほぼ翻訳不可能なほどに日本人の美観の母型を形成しています。仏教が移入されてからは、〈空〉という言葉でも表現されていますけど。たとえばそれは、冷や奴の美味しさを外国の人に説明することの難しさに似ているかもしれません。冷や奴には、ヨーロッパや中国の料理などと共通する美味しさは、あまり無いように感じます。でも日本人には当たり前で、海外の方々には何のことだかさっぱりわからないような美味しさにあふれています。竹の中にいるかぐや姫が感じるような、〈そこには何もなくて〉〈そこがすべてで〉〈内側で〉ある感覚。そのような「一見そこには何もないように感じるんだけど、実はすべてが充満している…」そんなイメージを音で表現したい。感じ方やイメージっていうのも、実は哲学なんですよ、自分が考える筋みちを通って感じていくので。表現のあり方というのも、考えることで感じ方が変わっていく過程そのものかもしれないですね。

真ん中に琵琶湖が広がる滋賀県のユニークさ

中村●子どもの頃から琵琶湖を見てきて、琵琶湖は私にとって単なる水というより、生態系のひな型だと感じています。危機的状況において考えぬいて対処することができるミニマムな基盤としての小宇宙。現在、私は大学の近くに住んでいますが、そこも一つの生態系で、その中に自分が存在する感覚でいます。留学中も、旅行をしている時も、すべて常に同じようにそこを生態系のひな型として捉えているようです。水が地球を人間の体の中を循環するが如き、消えることのない感覚です。

若林●それは素敵な心のかたちですね。ちょうど私が滋賀県に住むようになった時期に、中村さんは京都に居を移されたのですね。「すべての真ん中に母なる湖水がある」という滋賀県のかたちには、他にはない建築性があります。台風の中心には、無風の空間があり、銀河系の核には、ブラックホールのような時空の特異点が存在していますし、宇宙は〈なにもない〉ところから突如誕生したというのが近年の宇宙誕生説の有力候補です。全てが何も無いところから生まれるって、どこか滋賀県的なユニークな雰囲気を感じるなあ。

中村●それは4月に世界初演を迎えられる若林さんの作品「飛び出し小僧Ⅱ」とも関連していますね。

若林●その通りです。「飛び出し小僧」…飛び出し坊やは、滋賀県発祥ですね。数年前に誕生40周年を迎えました。見た目のアニメ的なイメージや、みうらじゅん氏の分析などもあり、街角に複製のように増殖していく姿や、微妙な手書きのさまざまな異種変化もふくんで、現代的な側面を多く孕（はら）んだ「いま／ここ」でしかありえないモチーフでしょう（笑）。今回世界で初めて演奏されます。とても楽しみにしております。

中村●自分の曲が演奏されることはうれしいですが、できた瞬間から寂しさも感じるものですね。自分の生んだ子を育ててもらう感覚に似ているかもしれません。作曲するのは自分ですが、出来上がると自分だけのものではなくなりますからね。もちろん曲は自分が書いているのですが、自分一人ではつくれるものでありません。歴史、風土、季節、波動などさまざまな要素が交差することで出来てくるものです。出会った人や出会ったことのない人、行ったことのある場所や行ったことのない場所、さまざまな〈位相〉の重なりが、結果

「地球と〝対話したい〟という思いその方法が音楽なのでしょうね」

作曲家　中村典子（なかむら・のりこ）

1965年草津市生まれ。京都府在住。京都市立芸術大学音楽学部作曲専修卒業。同大学院入学後、ブレーメン芸術大学へ派遣留学。91年同大学院音楽研究科作曲専攻首席修了。95年第1回小倉理三郎音楽奨学金を得て東アジア音楽研究のため渡韓。89年デビュー作は、日韓数々の舞台と共に95年サンフランシスコ歌劇場連続公演。2001年京都市芸術新人賞、平成22年度滋賀県芸術文化奨励賞受賞。京都市立芸術大学准教授。

未知なる音楽の旅！作曲の秘密を探る

「表現とは社会的な行為！いま・ここに生み出される表現の意味を考えていきたい」（若林）

「日本語のポテンシャルは世界最大級！これを生かして『なぜ？』を問いかけ答えてゆきたい」（中村）

として曲となっている。本当に不思議な感覚ですが、そんな思いが常にあります。

アイデンティティから生み出される音楽

若林●現在に生きている過去を「伝統」とよんでいるのです。過去の音楽を編曲することが、私は好きです。表現としての現在の意味＝いま・ここで行われる意味を作品にもたせようとしてアレコレ手を尽くします。私は「現在の意味」が刻印されていないものにはあまり興味がもてません。ですから例えば、上手に編集された音楽は耳には快いのでしょうが、それだけでは社会的な意味での存在意義が私には稀薄に思われます。例えばブラームスの作品で考えてみましょう。同じ曲を演奏することに変わりはなくても、ブラームスが生きた時代にドイツで（新作＝当時の現代音楽として）演奏されること、現代のドイツで（彼の死の百年後に）過去の音楽として演奏されること、現代の日本において（まったく日本とは違う文化体系をもつ異国の過去の音楽として）演奏されることは、それぞれの意味が全く違うと思います。そのような意味で、いま・ここ＝現在の滋賀県に生まれる音楽表現を、あらためて感じ考えていきたいと思うのです。

中村●過去、現在、未来、それぞれがスパイラルとなって、重層的に繰り返されつつ層をなす感覚。これこそがこの世のあり方かもしれませんね。先ほど若林さんがおっしゃった里神楽への憧憬（しょうけい）は、私も幼少期オルガンを弾いていた記憶とともに神楽を楽しみにしていた記憶と重なります。日本文化は伝来の文化と言われます。伝えられた文化はやがて伝承され、日本固有の文化となり、私たちのアイデンティティをつくり上げてきたのです。この記憶なくしては作曲はできません。また日本語の特性として〈間〉の存在があげられます。行間の〈間〉は、逆に詰め込むこともできる〈間〉ともなる。さらにひらがな、カタカナ、漢字、アルファベットを自由に行き来するという幅の広さ。他の言語にはない、世界最大級の起爆力と言っていい。このポテンシャルも日本語の魅力です。この特性を見据えて、「なぜ？」を問いかけ、答えてゆきたいと思っています。

Information

若林千春作曲「飛び出し小僧 Ⅱ」世界初演！！
篠崎靖男プロデュース・オーケストラ・シリーズ vol.6
5262 **浪漫爛漫 ブラームス&チャイコフスキー**

4月17日（日）15:00開演　びわ湖ホール大ホール

■指揮／篠崎靖男（静岡交響楽団常任指揮者）　■ヴァイオリン／漆原啓子
■管弦楽／日本センチュリー交響楽団
■曲目／若林千春：「飛び出し小僧 Ⅱ」～オーケストラのために～（委嘱作品世界初演）
ブラームス：ヴァイオリン協奏曲ニ長調op.77
チャイコフスキー：交響曲第4番ヘ短調op.36
■料金／S席5,500円 A席4,500円 B席3,000円

特報

しがぎんホールシリーズ2016-17では若林千春さん、中村典子さんの作品にスポットを当てた公演を企画中です。乞うご期待！！